



攝品金龍寺縁起

テ

教林文庫  
文庫7  
298



多



三 願我值遇三世佛  
應時應接妙辯才  
隨佛常轉妙法輪  
能助彼佛大小化  
四 願我十方佛滅度  
再批如來正法炬  
恒為衆生擊法鼓  
求法興隆勇猛力  
五 願我十方無佛國  
截彼種種邪見棘  
常彼善友求正法

一々兼仁無空過  
問難如來決衆疑  
廣度無量無邊衆  
猶如文殊及弥勒  
正像末法欲終時  
令繼後佛不斷滅  
降魔制敵為法雄  
一如法涌常啼等  
開佛教門示衆生  
令人如來正見中  
欲同善財及雪山



金龍寺縁起上



捕津國金龍寺此千親因信と信姓楊氏中納言  
云頼之の二男相換守敏貞の親長此影子あり其母  
子ありふよるとく竊に信の親言を頼信  
從同友の本に記言ありて此を信と母一子  
成まうく信と宿縁なりと信の母いひに  
言ふ母なしくと信の母いひに信固はるるを  
信は信なりと信は信なりと信は信なりと  
又大空の利益をそのまじ今宿業をまじり  
らうと信の母いひ大空の誓願を作く信は信なり  
つるおしなりと信の母いひ信は信なり

へいふも其時親音の口づらと蓮花一葉を結ぶる  
夢さく先く後身あつらんもこゝにばらりぬゆせばは  
をかきふふらふふとかなりあり 貴れ程を人  
らして即懐妊のさるゝあると詔胎月みらさる  
延治十八年 戊寅正月十八日母くぬ 一となくして  
けあゝ結心の男をうけりり子平親言此利生ある  
故ふ郎其子を千觀と名づけられし御い  
ゝあつてのらばは忠厚とてみらぬ御ふれ  
ふふなり 一水く信慶とす 一となくしてはねを  
と信偏ふ傳 中ふとがしめしうかひられし

遂ふ春秋十二集とては教ふふられりて  
智院の師の門徒ふくゝり運慈母傳のまふ入  
か家得度をとめてのらばはわらふとあり  
そふ御子親くせられし御千手院は信て  
て密教をまふ子あは御高は起くす法をこむひ  
合時然のそきてまき書束をけりて密教  
とうきこころふ身命をこころめ信りり一念こふ  
此信はあめらふて 一五相之密の秘行し  
ひのあはしむたはらゆかるとまきしと願徳一と  
いゝまゝにまきしと願徳一と

智證大師の門徒之并寺よかひらしめてつらき  
 内侍も彼後此年乃南院のわらふ修行之坊とつふおは  
 そみ修いなる青叢初の待てお東宮をよりん  
 松の尚あはれみく招のしきん言をさる  
 修行之の修者もくは修禪の家に入れあり  
 されやも明葉信都慶祐大河岡梨慶暹ホの  
 いみまき内通をくら内侍のゆきとて彼市  
 になしとてう野家れ身もを法し修しき

一夫唐八年夏のときあか内侍修野のつち途く  
 歩をこころ修行修修られ西天とて感應を

それく相城の紀のいふあしすむのし修  
 をとめして谷既を可求ふまを修ふとてしよ  
 日中第一の大菩薩とて誓ふ百法のあはれ  
 驚きはらひ衆生とてけしなれは一月は  
 ねのしきかゝるおは修修のをいふ  
 ところの場ふま事これ就念をいふ修修の  
 して平誓まゝのいふのし修修のいふ  
 くれほえ修いて内侍のし修修の信ふま  
 いふへまをさるいちあはれ修修のいふ  
 物修ふ信次くくして修修のいふ修修の  
 内感のし修修のいふ修修のいふ修修の





了修より三精をけしちし海路から小川原  
河原ありき色よ人のわさびのそりら金鼓を  
うらしてさきさきよ金鼓をこしきり始りしは  
あひ修めまの目倍らうこ車くらとれま  
對面しこの修りやうしし修修修をき  
影響の修修をきぬとくともお利の元  
たらつりていまこ由誰のなかり成る修修  
古賦よりこれ命根ありお開のこおだんけん  
や修修修修修修修修修修修修修修修修  
改よちりし修修修修修修修修修修修修  
事修りまうる人いし修修修修修修修修

と人これをいしししししししししししし  
しししししししししししししししししし  
と人しししししししししししししししし  
力あれは分衛のししししししししししし  
くまありしししししししししししししし  
なれはたりししししししししししししし  
ふあしししししししししししししししし  
うあしししししししししししししししし  
まの其内修長の修修修修修修修修修修  
の修修修修修修の修修修修修修修修修修  
あししししししししししししししししし



あり又菩薩の行より利徳をいふこと  
上人を我より劣る善知識とあり信じて  
りよ大出れおふろしむる信ありゆややく  
一言をうき給ひしところふの信をれら  
る人おのきしと形あへのおんいひしこと  
いふも早し身成るしとちやうらりい  
かきしことたあへんしとあれはやくは  
とれし心無待り随日晩止身無住り難夜曉  
行悲辱衣厚不痛杖木尾石慈想室深不閑  
詈誹謗との信して金鼓を打てしやふ念仏  
——してうらり給よらる

肉信空也のしとをとき行ふは証をれあり  
さまちりつふたやえし高麗の車よのし  
うれくちあしやんはらり想又上人のあま  
はまを身給ふおろし十萬億土のやばわ  
くを千五百劫の月——のや——給ひ  
事——信の想おこしむるもまの津渡  
たふか——上人は身成るありと信らん  
といふしは——信をれらる名  
利の信ををとて悔ふこと言の信を求り  
しうの信をを父の功徳も言天徳も言  
のはまふれ信ありしと信の信——

縁ぬい〜まをた虎もなほ〜  
山も時どかた〜  
車ふら〜  
我ら〜  
さら〜  
安楽〜  
母の〜  
あ〜  
け〜  
又父母〜

む檀ぬゑ小枝作〜  
此力より〜  
家も〜  
〜  
〜  
〜  
〜

〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜  
〜

彼取のして十種の大教ををりては生極楽海  
と云ふ文をや此の如く云ふかの十種の大教の  
頌小回く

一 願我普搜釋尊教  
念々遠離諸塵勞  
信終身心得安適  
二 旋陀羅尼華三昧  
願我速還娑婆界  
遇彼慈尊三會席  
盡未來際興教法  
能忍三毒度衆生

具覺如來權實道  
現身必得六根淨  
往生極樂上品蓮  
同彼南岳五天台  
興隆釋尊遺法教  
最初得受菩提記  
乃至釋尊在々國  
一同釋迦本弘誓

三 願我值遇三世佛  
應時應機妙辯才  
隨佛常轉妙法輪  
能助彼佛大小化  
四 願我十方佛滅度  
再批如來正法炬  
恒為衆生擊法鼓  
求法興隆勇猛力  
五 願我十方無佛國  
截彼種々邪見棘  
常為法故捨身命

一々兼任無空過  
問難如來決衆疑  
廣度無量無邊衆  
猶如文殊及弥勒  
正像末法欲終時  
令繼後佛不斷滅  
降魔制敵為法雄  
一如法涌常啼等  
開佛教門示衆生  
令入如來正見中  
令諸衆生知法恩

六 尋彼善友求正法  
願我十方三灾劫  
能救三灾諸急難  
凡厥身心諸病患  
乃至十二殊勝願  
七 願我十方三惡道  
以我善根勝妙報  
拔濟水火刀劍中  
乃至大悲威神力  
八 願我無始生死來  
怨親遠近結緣力

欲同善財及雪山  
大定智悲誓願力  
皆與世出世間樂  
一聞名号悉解脫  
等同藥師本弘誓  
代諸衆生受衆苦  
悉皆施与諸衆生  
忽坐清凉蓮花座  
即同觀音地藏等  
見聞觸知諸有情  
同生我成佛國土

或為生身善知識  
乃至四十八願  
九 願我十方諸有情  
皆為無緣不請友  
雖有質尋諸魔軍  
速令具足諸悉地  
十 願我盡窮法界中  
常居一處不離身  
隨彼無邊機差別  
皆坐妙法心蓮臺  
日景頻傾年先空移  
一生半道遺命不幾佛

或為法門諸眷屬  
如彼西方弥陀佛  
發心修行諸善業  
必加威神令究竟  
則令退散不得便  
等同一字金輪尊  
一切有情非情界  
大悲不捨常隨逐  
普門示現能引導  
同證大日法界躰

教難遇 人身希有若空過此生者定後悔不可  
及努力カク之云庶勿失時ミチハクハシ又出家是前哲之跡然  
人多不堪カク隱遁亦古賢之風逐者猶少至于  
此發願者誰人不堪カク之哉内伝善西寺小とみ  
ゆきカクとカクなカクらカクしカクたカクれカクるカクはカクやカクおカクぢカクえカクゆカクひ  
すカクむカクわカクらカクゆカクひカクしカクしカクくカクはカク佛カクとカク我カクと  
るカク海カクのカク代カクをカクあカクへカクくカク結カクぶカク中カクはカク初カク念カクし  
ゆカクひカクさカクるカクしカク東カクのカク寺カク善カクはカクあカクらカクしカクくカク徳カクのカクの  
念カクふカクなカクらカクしカクまカクらカクしカクくカクれカクしカクうカク初カク信カクのカク心カクしカクくカク形カク色  
くカクくカク應カク和カク二カク年カクにカク喜カクのカクはカク彼カク善カク画カクをカクしカクくカク  
書カクのカク心カクをカクきカクうカクめカクしカクくカク揚カク摩カク道カクのカク北カクのカク心カクしカクおカクく

ありされちんらむありしてみゆふよいられ池  
ありやの氷雪ふよ映徹くくはゆれりり  
しれま今念の徳もこれ代のこころう  
たらしむらひする池のあふしうれ伽藍あり稽述  
ふれ形像を安んじてあゆみの梅詔をそん  
ましん人初念をくくしんまらあり  
くく又び心の代形をくくしんは西方をくくれ  
くく日親のそくをくくえあ海遠ふのくくんて  
水想よおしんを願しんは心くく念を  
のたらしを得くくしん天家ふ地をくくく地我ふ  
心をあふしんをくくしんは心くく念を

せの海のしらへも *mother* の *mother* して *father* の  
 今池のちとけし *mother* の *mother* して *father* の  
 肉倍は *mother* して *father* の *mother* して *father* の  
*mother* の *mother* して *father* の *mother* して *father* の  
*mother* の *mother* して *father* の *mother* して *father* の  
 かも *mother* の *mother* して *father* の *mother* して *father* の  
 一七の *mother* の *mother* して *father* の *mother* して *father* の  
 あら *mother* の *mother* して *father* の *mother* して *father* の  
 せい *mother* の *mother* して *father* の *mother* して *father* の  
 ち *mother* の *mother* して *father* の *mother* して *father* の

ありの相を *mother* して *father* の *mother* して *father* の  
 せい *mother* の *mother* して *father* の *mother* して *father* の  
 地 *mother* の *mother* して *father* の *mother* して *father* の  
 の *mother* の *mother* して *father* の *mother* して *father* の  
 今 *mother* の *mother* して *father* の *mother* して *father* の  
 旧 *mother* の *mother* して *father* の *mother* して *father* の  
 せい *mother* の *mother* して *father* の *mother* して *father* の  
 あ *mother* の *mother* して *father* の *mother* して *father* の  
 ち *mother* の *mother* して *father* の *mother* して *father* の  
 今 *mother* の *mother* して *father* の *mother* して *father* の  
 せい *mother* の *mother* して *father* の *mother* して *father* の  
 来 *mother* の *mother* して *father* の *mother* して *father* の

味をうけとらるるふ取よあ〜とや神龍〜を  
 をせらるるかたをきられゆ教のまゝあり〜  
 取をかく〜たらしと作はされ龍神と龍大柱  
 の化現利物に方便なる〜其故と經申〜  
 君有會獸令起身者必是菩薩〜と〜け〜  
 身の色令ふあ〜と〜は〜あり〜  
 あり〜と〜た地菩薩阿耨達地の龍〜  
 あり〜と〜の菩薩を〜〜一切を〜  
 辭者のはに自由をえ〜あ〜秘〜  
 の意を利は日長は水を流〜  
 川〜と〜龍別弘は所乃物信

ぬは金〜の形を林泉苑の〜  
 目信れ形信も〜金〜の浪れ〜  
 あ〜と〜無熱惱地の流れ  
 勢と又善女龍を〜  
 是ふ〜と〜病疔〜  
 て地ち〜と〜病恙〜  
 矣早〜と〜け〜  
 備〜と〜甘飯〜  
 揚別百練れ鏡の〜  
 今年〜の〜と〜一滞を〜  
 福〜の〜と〜岸〜  
 地〜の〜

をみらいのうれも大淵満とて峯をうばひ  
森白のの坊を深大早りの湯せは神龍池よ  
あつけさ水つねよかいらととくさうさか  
池さふあつた

金龍寺縁起中

因信神龍此寺瑞をあらうと始てのちと山後  
の瑞信よりとつとつと美入るれ徳成あつとと  
いふとれ一死ふ吾をいふれ徳をいふとと  
そととふ康保元年の春とつとつと一とつと  
をさつととちまのつとつとつとつとつと  
吾等のつとつと安んつとつとつとつとつと  
とつと今吾等のつとつとつとつとつとつと  
の誓いつとつとつとつとつとつとつとつと  
織梅とつとつとつとつとつとつとつとつと  
つとつとつとつとつとつとつとつとつと



是雄胡氏草創の如影を以て堂舎十九宇を  
建てるべく是城安備を以て今之稽也堂を  
これより一なり其後一百餘廻を以て金終  
の場ありこれより一なり内信を以て  
ゆゑ金終を以てありけり又此堂は  
應永ふ石の塔城を以てこれより一なり  
靈終あり

内依ふれ善賢道場より一眺めらるる此城文  
を備へて葺き此城を以て一なり此方の  
行業は終へて終幕なりとあり

仏を善賢ふ念ふ此城を以て一眺めらるる此城文  
漏へて一なり此城を以て一なり此方の  
この堂はこれあり一なり此城を以て一なり  
此の堂はこれあり一なり此城を以て一なり  
なり此城の後より一なり此城を以て一なり  
終へて此城の名を以て一なり此城を以て一なり  
此城を以て一なり此城を以て一なり此城を以て一なり  
これより一なり此城を以て一なり此城を以て一なり  
なり一なり

凡思得れ衣あり一なり此城を以て一なり

人成はくくみ物をあられじさるうら病い  
くく或日清湯はけらまのえぬ人亦復病はら  
らくくありくく清くする身十此別も教深よ  
ま家飲の代一町をさひうまくくえぬ人をう  
まうまくくかるとまくく人ともありまうら  
らうまひたじくかともなりきる城の自れ  
まわれも人をあられじまきまめ妙本を信ま  
まら功徳よりまきくまたりくくて或けよま家食  
をほくく 癩瘡を療まら 病ひくる大慈大悲  
の仲志向くく人あられ即け病れうらふ  
一うのまをなま 十百款言の像をあまて

他人より平きくうら病ひまら今清水坂のま  
わら雲とくくまこれあり清くまらくく坂の他人  
をまらくくまらくくけま 聖賜をまけまら  
まら親肉信れはあまきみありまらくくあ  
まらまらくくまらくくまらま武家れ所病ふ  
他人より書はまきありあま 此えぬ人よまら  
まらありれまをまけまらまらまらまら  
まら作めまらまら

安和二年のはるふふ早くくして万民は事  
成まらくく一人も毛をうけく病ひ病ひの

有智の行此信仰よ世はせはひぬく祈願  
—— 流まれども天ふ片し雲ふく地—— 一掃  
ふりたればまじと冷泉天白し勅使を子親内伝  
此草奄ふばうり—— 西澤傍に乃初夜をひき  
りくまきよう—— 祈じしうふ始あり言れども陽道  
の身をりく論言意—— かのまきう—— 一掃  
尸これまじし勅使教言—— 感動りしもの  
とらふこれ—— 其ことまき言提と報國をた  
と使いし—— 勅命これかひうらまきよ—— 尸  
うきおれら内伝勅使のうらまき言とまき  
花を信—— 自ら善徳をうり自ら祈元と備—— 尸

望輝し秋高し—— 流すすれら禅念をひきし勅水  
を天よやまき始め善徳言とありてまき申に  
みら瀟水高しならまき—— 下—— あまき  
六十餘の—— のらた甘樹らひ—— かのまき  
は雨うらばはし流し—— 自ら祈元と備—— 尸  
かひ—— 自ら祈元と備—— 尸

勅使ぬき—— 海はまきうらひ—— 事れは身を奏  
やふまきと教誡のあまきうらひ—— かのまき  
こまき言まき—— 世の業をまきうらひ—— 尸  
と—— 花うらまきまきうらひ—— 自ら祈元と備—— 尸



隨喜千阿闍梨十大願結緣偈 并序 源為憲

天台千觀阿闍梨者智證大師之門徒相列  
府君之弟子也蓋戒珠臺智鏡筆首弘法之  
輩無以加之時人以爲緇門之棟梁也天德應和之  
際志樂靜處退居於堪列其面觀音寺矣當  
余時發十大願載爲一卷有才子爲愚才微禪  
師者專書一通相祝之其文云願我普搜釋尊  
教具覺如來權實道十大願云云一々讀誦念々  
歸依方今舍利之證菩提衆生之蒙引導誰  
敢疑之者哉今乃瞻部洲日本國々子學生源  
爲憲發一大願々生君成佛之世界爲一才子辭

猶身子目連之言於釋迦也我尊靈山釋迦牟  
尼佛說云佛種從緣起又我大師大原白居易述  
懷云願以今生世作文字之業狂言綺語之過  
翻爲將來世々讚佛乘之因轉法輪之緣是故  
願跪於佛法僧之前以得願曰

歸命千闍梨 禪門之利器 早除有習業 先解無明醉  
雲散五溫結 焰消三毒熾 具足止与觀 興隆頭与秘  
智惠照多劫 慈愍及群類 煩惱常遠離 生死悉懺悔  
利益界是尤 衰愍生忽四 禪悅味不厭 糞掃衣（水莫）  
行六波羅密 先他而後自 入四無量觀 離欲而去睿  
能度娑婆衆 既作如來使 在昔求寂靜 住于觀音寺

寺僻山水深 人稀境幽邃 野鶴朝許文 峽猿夜隨派  
秋葉度林紅 春苔遶階翠 窓破雲空錄 門穿月深閃  
多有空觀發 終無塵慮至 坐禪亦經行 常行頭陀事  
今特發十願 堅固菩提志 從一至于十 心力普周示  
願樂往西方 化生蓮花時 願樂還娑婆 興法任心意  
願樂遇諸佛 兼社妙覺位 願樂教法修 再令正法致  
願樂求正法 不與雪山異 願樂三灾劫 救難將服食  
願樂代衆生 受苦到阿鼻 願樂見聞衆 引導不退地  
願樂諸有情 悉退魔軍率 願樂情非情 在在處處利  
願海一人大 我今誓首視 視了競結緣 一生過隙駒  
彌陀四十八 藥師一十二 前身發彼願 成道乃得遂

今日君十種 當來猶可比 昔有結緣者 他生十号備  
隨悉達太子 蒙花寂初恣 罵不輕菩薩 得益猶未墜  
況合歸依掌 况發隨喜意 從得十願來 誦之於寤寐  
我被愛見衆 火宅作幼稚 駟鷄坐書堂 惱螢照經笥  
報差是桂枝 負髮老洙泗 憂悲無間斷 昔別巖君吏  
殺生在孝道 扣冰窺魚萃 愚癡不退散 去年龍門躡  
六根之取作 罪障徒鱗次 適遇善知識 佛種自將暨  
歸此願王故 心地善根殖 歸此願王故 性畝善苗蔣  
君得菩提時 唯願勿弃置 君得菩提時 唯願常從侍  
我為一弟子 永有親近思 而助其佛化 惡業悉對治  
生々亦世々 隨君得受記 必入薩婆若 成佛作後嗣

一心作此偈、通計六百字、以為出世緣、次定与君值、  
書之白佛言、坐卧不可弃、朝誦復暮誦、命終手中執、  
肉信は偈什、を得く、值遇の心成感、誓願の  
趣を以て、感涙を多くかゝりて、字を以て、  
の詩を以て、新、其句云

余昔有時發十種願、為惡古賢之舊、張為救、至  
愚之新、罪者也、源澄才子、抽希代之心、而發誓、  
振命世之名、而飛交、集讀之詞、只在余之十願、親  
迹之志、遠期余之多生、見其文章、則陶潛之躰在、  
眼觀其義理、則摩詰之談、傲肝、不堪感吟、祈呈  
蕪詞云、介

沙門釋千觀

讀父一卷、沈吟、玉顏鏗鏘、直可、金  
句々、斷、腸、神、不、靜、行々、催、感、淚、無、禁、  
菩提道遠、艱難思、生死海深、老少女心、  
君若出塵、完此誓、定聞西界、世確音、  
彼源澄才子、以て、文の逸小、遊々、一枝、  
此桂を折、もく、けの、門、小、今、九、品、の、蓮、を、取、  
り、ま、ま、に、我、の、思、成、り、て、か、さ、ね、く、  
これをおと、其句云

天祿二年、秋、為、愿、若、隨、十、願、之、偈、分、作、三、本、  
一本、奉、子、周、梨、一本、自、持、子、中、周、梨、聽、我、以、佛、受、

此偈即作結録詩句價直百千兩金而以之才子  
一見生歡喜之心二見動感歎之心三見知因果  
之心僕優息不過塵區火宅之中法祐不過愚  
癡遊戲之客常歎送生於草露遺悔於寶山  
適作十誓願之讚歎遙為三菩提之因緣寔得  
善知識也幸甚々今之愚昧之志亦呈禪座者  
於意云何我有幸願々生君成佛之世界為一才  
子辭猶身子目連言於釋迦也一念不退三寶  
應知欲重宣此義而繼韻作之云尔

學生源為愚

慈悲佳句任恐吟

一繼孫家擲地金

歸願化城跋遠過

結緣朽宅戲先禁

君終他界明行足

我亦此生初發心

看取大師甚深誓

娑婆再似遇觀音

因信之有此昇沈もたけりかあゝ九品此經生ひり  
かゝるやわちえ知る心山陰の橋下へたりして橋  
かゝるは橋もふあやこれこわりの牛ふまゝ  
かゝるは福もあやうき物をあつりたるかゝるは  
あけしてさゝひくさく十惡五逆謗方等極重最  
下の罪人も一きんもあやうき物もあやうき物  
さゝかゝるは心もあやうき物もあやうき物  
さゝかゝるは心もあやうき物もあやうき物



田信之れをばおぼく信にまじりてもくはらへて  
おぼくはなかにわたりてまじりてまじりてまじりて  
和奇をうけしりてまじりてまじりて

たろうりや十徳入道勝方寺にまじりてまじりて  
けりてまじりて

弥池の名を極重宿下の羅刹の十をまじりて  
けりてまじりて

まじりてまじりてまじりてまじりてまじりて  
けりてまじりて

まじりてまじりてまじりてまじりてまじりて  
まじりてまじりて

柞山崎の信とて太平年中小行基菩薩建立  
のち勅命ありてまじりてまじりてまじりて  
河水蘇漫らるる今れまじりてまじりて  
宿まじりてまじりてまじりてまじりて  
坂本に巫女まじりてまじりてまじりて  
内宿まじりてまじりてまじりてまじりて  
二重まじりてまじりてまじりてまじりて  
まじりてまじりてまじりてまじりて  
まじりてまじりてまじりてまじりて

まじりてまじりてまじりてまじりてまじりて

りなれと流の波のほろまにらみをとあ  
くこのかといふは成るるはまふま千親垣内  
といははくきさるるこれあり求道のやうて  
名利の羅霜をさうもく徳を締め琳を露り  
相を揚を雲を隠さくさすささるるいあ  
漢胡女惠敵の羊はま<sup>キ</sup>あ初の玄賓の馬を飼  
これこれいあく——ああるのこなすは彼あふ  
これせまは喰ふ車を引て響く牛うらの  
とらりのをり重負く若く駒のきをこさ  
らきをみらふこれあき厭離のわはもより成は  
きくさくはやといふとわ——まはは喰はふ

は遠らく若く安をみらふ我はう想道不悔廻  
——いあくよらひいふはすじ——らう  
中人あつこい初の初れあさふ疲鳥の悲うたう  
をゆきくられらる家をはた我は信ありこさ  
の口れをさうこま微半のう——じこくこはみく  
そらまらふ心は養をわさく——けはく龍家乃  
形をわは——いやらくもま馬のそくいよ  
ちうつきはく縁を結く物成利——徳をかく  
して磨ふま——くちこくわ

金龍寺後起下

演此ころありて是利物結縁のころは馬か  
なとをきし給ふれども當寺のきき巻ふゆへに常  
に日想親をう衆し給ふまは極樂を祈りて  
まゝいへり母利ものきありては四公誓願の  
を初号ふ給ふころありてをいへり

衆生無邊誓願度

いふと日き候かき入るころはかきいへり  
いれもころもいへりていへり

煩惱無邊誓願断

いへりていへりていへりていへりていへり

そとくうことうそひふまうらふ

法門無盡誓願知

ほみもらぬのつよあゆみとれぬあつ  
かきけろそねをあらはらぬまうら

無上菩提誓願證

やまれふかきまうらぬかきまうら  
戒めぬそらうらぬらふのそ

又八箇のいましむをさうらぬ末代をさうらぬ  
衆の和讃をけくつらぬ人よ縁をじとらぬめ  
まうらぬ道作實法あゆみゆけ縁をさうらぬ

のろまうらぬつゆけらぬのろまうらぬ  
二第これ白ふそまうらぬ教篇の辨けを  
をらぬつゆけらぬつゆけらぬつゆけらぬ  
修示の初階子八箇の修示は

八箇條を請

- 一 自病患之外不可闕例時勤
- 一 念誦讀經之中不可更世俗言論
- 一 常守身口意不談他好惡長短
- 一 於無益言論縱雖得其理不可諍論
- 一 於親友同行二事已上不可內外隔
- 一 徃生極樂之外永可絕世俗帰らぬ

一於修學事雖非其器致慙慙必成就  
一繫心於如來佛常我常愧我罪業  
若透此八事當知此獄人若順此八誠當知淨土人

寅卯 修行 觀法

辰巳 轉讀 文書

午未 徒眾 同字

申酉 文義 暗誦

戌亥 問師 要次

子丑 休息 全身

右子卧寅起餘不眠止無益語及往還若修若學  
捨懶倦寸法寸時勿徒然制禁意馬常加鞭釣得  
心無莫放筌繫念往生極樂運遂此身靡惑障  
牽念佛黃昏心穿々觀身曉漏淚健々骸在於

閻浮蓬下神愁於炎魔廳前若有接念山林之  
聖者採菓拾薪供給以須若有建立堂塔之事  
者伐木下後造畢作事煩惱家狗打而不去甚  
從野鹿繫而難馴隨世似有至背宿如狂人不  
寧世間或何處隱一身信心是深豈隔極樂上品  
之運善根無量定期彌勒下生之曉以八事誠徒  
衆發十願導群生矣  
極樂之祈禱

少くも此安樂の界の西の方より人の神々あはれ  
ゆへに此十善徳を因縁してついでにわが心も  
あはれに浄土ありの極楽界にわが心もあはれ

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or historical document. The text is written in a cursive style and spans the width of the page.

Handwritten text in Arabic script, likely a religious or historical document. The text is written in a cursive style and spans the width of the page.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a fluid, connected style across approximately 15 lines.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a fluid, connected style across approximately 15 lines.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a fluid, connected style across approximately 12 lines.



凡天慶以前より後醍醐の御代に在りて  
されありきり空也聖人千載内儀れとて先々  
一して淨法金佛とてつてつてつてあり  
十載の文中中一も年尼之日脱履急ぎ之月  
未變毒草深人持淨之藥雅本心脱失其見  
之細細種不ぬ家深陀那方期九品之其一  
こゝに於て

内儀往生の行業の事  
大事義科の事  
あり先られたる其の事

釋をあげ先書くこと  
なりまられきり  
く牛よおせし  
る昔の日はあり  
人をいしておと  
おたり  
形  
され人思  
入修  
こら  
こみあり

此方書此經義の今地幸うと徳の釋義の  
同人も各人ものいふと即これなり

或時書しの書ありていふものいふもみえわ  
るは信者の水鏡のほけいれ水もそやきえん  
る色もいふりて人稀りてかくる極一  
音

そゆちりていふなり  
いふれもまをいひていふれ  
つ極の事ありていふなり  
は身れはちりていふなり

いふ海から動機の中のものいふなり

行業漸くはちりていふなり  
もや或河長のいふなり  
内信よ昔のいふなり  
蓮をいふなり  
曉をいふなり  
来れ極のいふなり  
は佛子を留入るなり  
いふなり  
いふなり

蓮葉ハ草一菴の前ハのうらうらと夕陽ハ酒ハ眼  
十萬億刹の夕の光ハかかやと白毫存ハ遠らふと  
上生ハ後の月をうけとらと于時因融院の浄土水鏡  
元年亥末大呂丁百少年とありてたりとね  
智解し秘ハみた賢哲ハ閃電の光とら海とれ  
く療愛心けとせ兒孫ハ石火の景とくくは復  
卒院の信信うりしとく村軍の道信ハ心とら  
浄土をそとく人離愛をわのじと雙林ハ滅度  
よれなり

福宗列をわのてて流川ハわかれ男女徳をさ

いづく想火ハこのうらとくとも終由茶毗時面とせ  
昔を墳墓ハたさ光とくしうふ竹とくきと救世  
親言の徳とを残長の月ハあぬとくこのまじ  
かこしけあく千と子眼のま昔を金鉢ハ言ハ  
あつり春の嵐秋の霧ハ瓜葉をたててと一葉ハ  
いりと昔の遊み子所えのあしたの心とくふと  
あまハ義觀とく人とく人戒け多の中ハとま量ハ  
靈願ハ来りて昔はりらとくあまハとく舌徳を  
とりての遠とくふきとくまよとくあまハ  
この作とく是神花ハ帝宅とくこのまハあつ佛と  
依止とく所とくとしとくは清とくまハとくあまハ

見をこころはらひしや内信平生は付檀中誠を教忠那  
 の才一の如く所禮れあはくまむくうたり〜ある  
 縁ありきる為ら〜のきるは〜終季の〜らあ〜次  
 生前を〜り〜縁〜こ〜に内信人滅つ後〜  
 のほ〜を〜〜〜彼あ〜れ〜中〜は薄にれ形〜の  
 つ〜〜ち〜〜〜れ〜ま〜前〜ら〜つれ〜のふ〜く〜た〜  
 ま〜ら〜と〜近〜さ〜〜〜ま〜は〜〜結〜を〜〜と〜海〜邊〜界〜の〜  
 方十万億の國と〜と〜く〜浄土を極樂界と〜と〜佛  
 肉〜と〜ん〜法〜地〜と〜と〜養〜そ〜若〜け〜り〜を〜〜と〜一〜ら  
 此極樂の祇園を補〜〜と〜ゆ〜き〜と〜と〜と〜り〜結  
 ひ〜あり

當寺とて元神龍池也。堤〜〜と并駕成致〜柱化  
 美譽を〜と〜は〜ま〜と〜ふ〜法〜正〜法〜〜これ〜と〜と〜  
 五代つ ところ尊崇の寺あり結〜と〜下〜此泰平花  
 袴に代の將軍優賞の比なり。派用東北秘徑を  
 作くさうの〜と〜代中は清澄子の沙門を惠〜と〜ふ  
 のは美傍痛の法よ〜と〜と〜〜白牛此奉は〜と〜て  
 美皇の聽よ〜と〜と〜と〜と〜ありま〜時〜夷魔大王  
 その恵よ〜と〜と〜この縁〜と〜核列の肉小行と〜の靈化  
 又町のり〜と〜金龍と〜と〜これ甚〜と〜と〜と〜と〜取〜  
 傳心を日城の岡ふ〜と〜と〜と〜の〜と〜と〜と〜と〜と〜遠小寺号

を島靜の城よりしりふかぬあつひ城といふ棟を  
しり人若忠をこころい衆邦よき人といふこと  
城かの西天よ一の國のつと居するもの道心か原よ  
よ一れ天ありまもれむらむがいをかきと并列の  
人よ必法施を念して安養よせいんが忠のまをきて  
涅槃を信して捨落よた片蘭並つるよ入純良の  
群ふとむもの可よとと棟小遊つるよしありも  
ことなりや——さうる官様よあをのいしゆ幽閑の  
法をせり人多く今終の瑞き——思をかけそ  
西毛の蓮番よをうらふ城さるこれ那大方のかまへ  
じあり——の序利物のちひのあまきなまのいしゆい

方今先徳の一期を彩畫して後代の聖徳よめ  
るしり事——むしよは初野を近あり終くまの  
を十教の文よめきく福来貴族して志を  
み社の終よこころ——先じりから先なり佛持と縁  
よりから法業よさむらうと生法信をまじり入る  
や善ふかめい縁をむらうれと利益ふりけん  
や新八丹青よ徳をあらうはをうう西刺よ値得  
るしりまうしりしらへ

元禄十三年秋七月九日以金龍寺藏本謄寫  
山ノ横川魁率之弱頭院嚴寛

